

先生なら、 どうしますか？

教師は、生徒の「どうあるべきか、どう生きていくか」という答えが1つではない問いに、生徒とともに日々向き合う。教師としての指導観を問われた「あの瞬間」を、当事者の教師が振り返る。

学校を去る生徒が 次の一步を踏み出すために、 時間をかけて取り組んだ 「中退の理由づくり」

静岡県立小山高校
美那川雄一

みながわ・ゆういち ●同校に赴任して4年目。
地理歴史・公民科。生徒の学力の状況にかかわらず、
生徒が歴史の学び方を身につけ、歴史を学ぶ目的を
見いだせる授業を追求している。

□ 数は少ないけれども、部活動には積極的に参加していた男子生徒のAさんが教室に入れなくなり、保健室登校をするようになったのは入学式から2か月が経った頃です。Aさんの担任も、その学校で初めて学年主任を経験していた私も、Aさんが教室に入れなくなった理由は分かりませんでした。

保健室で自習をするAさんに私は、社会科準備室に来ないかと提案しました。私の授業の空き時間に、クラスや家庭でのAさんの様子を聞いてみようと考えたのです。

「勉強は苦手」「進路の目標も決まっていない」。高校生活に前向きにはなれていないことが彼の言葉からうかがえましたが、人間関係のトラブルなど、教室に入れなくなるような理由は見いだせませんでした。Aさん本人も、なぜ自分が教室に入れなくなったのかが分かっていないように私には思えました。

夏季休業が明けると、出席日数の不足による原級留置が現実的になってきましたが、教室に入れない理由は分からないままでした。「学校、やめようかな」と口にし始めた彼を見て私は、教室復帰は困難だと思いました。そして同時に、このまま学校をやめさせたくないとも思いました。中途退学は避けられなくても、Aさん自身がその理由を認識することで、次に進むべき道が見えてくるのではないかと。そして、明確な理由はAさんも分からないのだから、Aさんと一緒に理由をつくるしかない。次の一步につながるのであれば、Aさんが納得できるのであれば、あとづけの理由でもよい。私はそう考えたのです。

高 校生活で楽しかったことや嫌だった時間などを、私はAさんと何時間もかけて振り返りました。「人が多い場所は苦手」「社会科準備室は1人だったから平気」。そんなAさんの言葉に、「周りの目が気になって教室が嫌になったのかな？」などと応答しながら、学校をやめる理由と次の進路を選ぶ際の留意点をAさんとともに探しました。そうしたやり取りを積み重ねた数週間後、初めてAさんから「通信制の高校なら頑張れるかも」と、次につながる言葉を聞くことができたのです。その後Aさんは、通信制の高校を無事に卒業しました。

原級留置となってもAさんを学校に引き留め、教室復帰への支援を続ける選択肢もありましたが、私は彼が「次なら頑張れそうだな」と思って学校を去れるようにするための支援を選びました。学校をやめるという決断に至ってもなお、その後の彼の人生に、彼と2人で希望を見いだそうとしたのです。

「次の一步を踏み出すための中途退学の理由づくり」も支援の選択肢とする美那川先生に、不登校の生徒の支援についてさらに話を聞いたウェブオリジナル記事を、ぜひご覧ください。



<https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article29085/>

